臨床青年心理学研究（Ⅲ）

――男子症例に関する考察――

田畑　治　生越達美[1)]　間宮正幸[2)]
渡辺直登[3)]

Ⅰ　はじめに

筆者らは，青年が個としての人間生成を営むさなかで，必然的に出くわす自己確立，自己決定，個性化，個別化，あるいはアイデンティティ（自我同一性）といった危機（Krise）に直面することが最大の自己課題となる時期として，青年期を位置づけ，さらに現代的状況における青年に，より本質的に接近するために，方法論的な検討を加えてきた（田畑他，1977）。そしてわれわれの立場を3点に集約しておいた。

ところで，本研究をすすめるにあたり，ここに筆者らの立場を，再度あるいはより詳しくその筋道を明らかにしておく必要があると思われる。

まず第1は，対人関係の発達から症例に迫ることを挙げなければならない。この点をわれわれは以前に「対人的距離」の問題としてとりあげたが，自我の発達との関連で考えていく際，誕生時からの対人関係のあり方は，必要不可欠な条件であることを認識するに至った。とりわけSullivan, H.S.（1953）のいう前青年期（pre-adolescence）の時期の重要性を再検討すべきであるとの認識に立って，症例に迫ろうとしたことである。すなわち，前青年期は，Sullivanもいうように，社会化（socialization）という点からみて，もっとも重要な意味をもっている。つまりこの時期においては，同性同輩関係を通しての"chumship"が成立し，これによってひとを愛する能力が芽生えてくるのである。筆者らは，この時期に当る症例1をとりあげ，主題に迫ろうとしている。

第2は，パーソナリティ発達における〝籠る〟ということ，あるいは〝自己内閉〟の意義の重要性についてである。この点に関しては，われわれは以前に「青年期自我と秘密」の問題としてとりあげてきている。今回，この問題をより積極的にとりあげようとしたのは，これらの個における〝籠る〟ということ，あるいは〝自己内閉〟の世界を構築しえないでは，青年が青年として生成し，「社会との対決」もできなければ「自立」もなし遂げえないのではないか，と考えられるからである。

この点に関して，もちろん従来から，たとえばBühler, Ch.が述べている青年期の精神発達の段階における客観化から主観化への交替，あるいは牛島（1961）が述べている青年期の客観と主観の発展過程，客観と主観との転回関係とみる見方があることは周知のとおりである。[注1)]

しかし筆者らは，この問題をウラの世界の構築との関連で考える。たとえば土居（1979）が述べるように，「社会生活を営む上で是非とも必要である適宜な対人的距離を保つことは，オモテとウラの二本立てないし二段構えができて，はじめて可能であると考えられる。また人間的自由の本質も，オモテとウラの確立によってこのような対人的距離を保持し得ることにこそ存在するといってよいように思われるのである。」（128－129頁）という点で，〝籠る〟ということ，〝自己内閉〟の意義を積極的に

1）名古屋学院大学
2）みなみ子ども診療所発達相談室
3）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期課程）

注1）牛島によれば，このような転回，すなわち弁証法的展開の過程として，青年期を「精神生活」の時代と位置づけ，それまでの児童期の「知識生活」に明け暮れていた時代から第2反抗期に入ると，自然，理科，力といった生活特徴から，精神，人格，文化，理想といった生活特徴へと方向転換を起すようになる。つまり前の時代の，飽くことない知識欲への反動として，知的孤立化がはじまり，友から，家人から離れて，ただ1人いる生活，自分の心を静かにかえりみる生活のなかに，全く新らしい世界を発見する。そしていまや精神生活の存在に気づいてくるのである。

とりあげたいと考える。[注2)] 青年は，オモテとウラの揺れ動きの中で，あるいはその併存の中で「自己確立」をなし遂げていく力を得ていくことができると思われる。

もちろん〝籠る〟ということ，あるいは〝自己内閉〟によって，ウラの世界を構築することが本質であるが，本研究に用いる症例1～4における〝籠る〟ということの形態は，まちまちである。ある症例では百科辞典によって，またある症例はＵＦＯに夢中になることによって，さらにまたある症例は，自室に引き籠ることによって，ウラの世界を構築していくと考えられる。

第3は，このような世界を構築することによって，「青年期自我」を形成し，「秘密」を所有することができることになり，「対人的距離」を適切に保つことができるようになることの意義である。このような「対人的距離」を保つことができるようになる過程で，母―子密着の関係から自己と他者の分離―個性化が可能になり（症例2, 3），あるいは内的な親殺しが可能になる（症例4）。このような過程をたどることができるようになって，対人的親密性（interpersonal intimacy；Sullivan, H.S.,1953）が確立されるようになるお膳立てができてくるのである。

第4は，筆者らの接近の特質についてである。登校拒否，家庭内暴力等によって問題化し，危機化したこれら症例に，われわれは臨床的に継続的な援助をしながら接近してきていることである。すなわち苦しみ悩む青年（またはその親）と一定の治療的人間関係を保ちながら，臨床的出会いを通しての研究を特色としている点である。

以上，かいつまんで筆者らの研究の視点および立場を4点にわたって展開してきた。つぎに各症例について，考察を加えていくことにする。なお症例もちがうので，考察は，上の諸視点を踏まえ，各執筆者に一任した。

注2）土居（1979）は，オモテとウラの病理に関し，つぎのような5つの精神内部過程の変容を述べている。オモテとウラの変容の第一は，両者が未分化である場合。これは分裂病に対応する。変容の第二は，オモテとウラの分化が全く無意識になっている場合。これは躁うつ病に対応する。変容の第三は，オモテとウラの分化は出来ており，精神生活がこの二本立てによって行なわれるという原則は確立しているが，ウラの形成に不充分なところがある場合。これは神経症に対応する。変容の第四は，オモテとウラは区別されているが，この際オモテがウラを表現するよりも，単にウラを正当化するためだけの役しか果していない場合。これは精神病質に対応する。《変容の第五は略》

Ⅱ 症 例 1

1. 症例の概要

症例　J. M. 男子　来談時年齢　9歳10ケ月（小学4年）

1）主訴　熱発，腹痛，めまい，登校拒否。

2）問題の発生と経過

某年9月頃より熱発が頻繁となり，38℃以上にあがって学校を休みがちとなる。ときおり腹痛をともなう。近所の開業医からＮ市の総合病院小児科の著名な医師を紹介され受診する。しかし「こんなに調べてもわかりません」とのことで，その後も半年間にわたってその医師に「ぐずぐずと症状をくり返すのが不思議だ」と言われながら受診していた。

翌年4月に，筆者の勤務する小児専門診療所を受診するところとなり，リウマチ熱の疑いをもって諸検査するも断定できず相談室を訪れることになる。

この間合計10数日の登校拒否が確認されている。尚問題発生時の小学校担任教諭は新卒女教師であり，翌年も症児のクラスをもちあがりで受けもちすることになる。

3）家族構成

4人家族。父親43歳で大学卒業後，大手企業に就職し現在に到る。母親や症児は「しっかりしたお父さん」と認知している。母親は40歳。自己評価するところによれば，子どもには多少過保護であるとのことである。面接による印象では，いかにも良妻賢母型のやはりしっかりとした女性というものがあった。難点を強いていうのであれば，教育婦人とでもいうべき立派さが目立つ点。兄は17歳で，某国立大学理学部を志望して受験勉強に勤しむ好漢とのことで，症児は年長の同朋として慕っている。志望する大学は北国の遠隔地に所在する。姉は情報がえられていないが，中学に通う成績良好の女子とのこと。

4）本人の生活歴

えられた情報はほとんどない。学業に関しては，症状が明確になってきた小学3年時以前は良好であった。身体に関する著患は認めていない。乳幼児期の保育者は母親であった。

5）来談時における総合所見

熱発，腹痛といった身体症状は，心因・情緒因の関与が明瞭であっても内科学的，器質的，体質学的検討を怠らないこと。そのうえで子どもの発達環境をさぐり，臨床心理学的接近をすることが求められた。いわゆる学校症候群に属すると考えられるので，家庭と学校を中心とする協力体制を確立していくことが重要な課題である，

とされた。

2. 治療の過程

初回（小児神経科医の診察）：某年4月27日。問診において，母親は過去半年間にわたるこうした症状に関してひとつ気がかりなことがあると語った。それは，休日や楽しみにしていることがあると熱が下がるという事実である。医学的に原因不明といわれてさぐっていくと，どうやらインチキ熱なのではないかと思われるふしがある。実際，時には体温計を逆さにふっていたことを本人も承認している。ただ，熱がおさまっても次にはめまいが襲ったりするとのことであった。

医師は所定の検査結果からリウマチ熱の疑いもあるとして断定を避けたが，母親の訴えから心理相談を予約した。母親もこれを希望するところとなり1カ月後に面接することになる。

第2回：5月17日。経験4年の小児科医と臨床心理員の筆者がまず母親と面接。この間の事実経過をインタビューした。登校拒否とはいっても，〝行きたくない〟という意志があるという。母親の面接印象は，いわゆる神経症的人格を感じさせず，子どもに圧迫，拒否，侵入といった態度でも，あるいは自己中心的態度をとるとも考え難いものがあった。聞くところからは同朋ともまた善良な仲の良い関係にあった。

かくしてわれわれは，母親面接からは症状形成因に関するものを「感じる」ことができなかった。医師は一応腹性てんかん（abdominal epilepsy）のスクリーニングのため，脳波検査の指示をだした。

続いて筆者と本児の面接にうつる。いかにも登校を拒否しそうな風貌の弱々しい子どもであった。面接を深めてゆくと，母親がほんの少し口にした学校問題が大きく浮かびあがってきたのであった。

彼は「いじめる子がいるから行きたくない」という。やや肥満ぎみの身体で，「運動能力は劣るがもともとは成績の良いりこうな子どもだと思う」と母親が語っていたその如くに，彼は実際利発さをことばに表わして語った。初めはやや防衛的であったが，しだいに学級内部の何とも子ども集団らしい状況があらわになるのであった。担任は新卒女教師で，他例にもれず3年生を受けもつことになった若い女性であった。クラスに〝悪がき〟グループがあり，M男君が大将だ。その子の支配下にほとんどの男子が組している。M男の家はスーパーマーケットを経営しており忙しい。本児の近所に住んでいて幼稚園時代からの仲良しだった男子たちもみなM男の傘下に入っていた。本児J君のみが，あの聡明な母親の子どもらしく，「良いことは良いことです。M男君たちは悪いことしています…。」ときっぱりしていた。悪い連中の仲間に入ることを潔しとしない。彼らの数々の蛮行が許せないのだった。みかんの皮を若い女教師に投げつけることなどとてもできることではなかった…。それで，孤立無援の戦いをしているわけだった。蛮行は幾度も周到になされた。掃除用具でかかってきたり，つばを吐きかけられたり，はたまたケムシを背中にくっつけられたり，時には小便をかけられたりもするとのことだった。下校時には待ち伏せされているとも，くやしそうに涙を落とさんばかりに語った。

「くやしくてしかたがないんだね？」と声をかけると，答えていうには，悲しそうに「学校かわるかクラスかわりたいということだけです…。」とのことだった。

インタビューはさらに続けられた。「誰君と誰君が少しでも味方であるのか。」「女子はどうしているのか。」「先生はどうしているのか。」逐一耳を傾けて学級状況をカルテに書きこんでいった。およそ1時間彼のことばに耳を傾けて「きみのありかたは立派なものだ。そして共感を覚える…」そんなふうに伝えて面接を終えたのである。「身体をつくってM男なんかぶっとばしてやれ」等ともつけ加えておいた。彼は素直に，「はいっ」と答えて帰った。

第3回：6月7日。脳波に異常を認めず。母親に学級状況を尋ねると，少なくない女子が，やはり現在の学級になって学習意欲を低下させている等との情報をえた。筆者は医師の所見と合わせて学校長と担任あてに手紙をしたためた。[注3)]

本児は好漢の兄と共に，柔道を習いはじめた。

第4回：7月上旬に電話にて相談。あの時の手紙一通から，学校ぐるみで問題の解決にあたり，教師がM男の家族の調整をおこない，学級が平和になると，J君の症状もうそのように消えたとのことであった。父母達が「私のところも」と，問題の大きさを知って協力してくれた

注3）手紙の内容を要約すると，①病気の原因は医学的諸検査からは異常がなく，つかめないこと。②しかし心身医学の立場からは，患児の発達環境の調整，とくに学級集団の調整をしてみることで良い結果が得られるかも知れないこと。以上の2点であった。

ので早い解決ができたと，母親は伝えてくれた。

第5回：11月2日。日常臨床においては，症状消失があればそれ以上の問題追求を実際上困難としているために，本児の症例検討もせずにいたが，この日再び「関節痛，全身倦怠」を主訴として受診，熱発も含め，リウマチ熱として近医にて治療するように医師にいわれている。所内で会った母親は先の礼を当方に述べた。

しかしその後，母親から電話で「相談したいことがあるので都合つけられぬか」と尋ねられた。家庭内金銭持ち出しに関するもので，長い手紙を書いてきたところによると，あの事件以来喜ばしくも友人ができた。委員長のＩ君という。その子どもに貢物をしているらしいとのことであった。１度や２度のことではないらしいと。

電話にて筆者が伝えたことは，この問題発生の心理的背景に関する考えと，「対処の方法としては両親の躾に関するもの，あるいは愛と規律に属するものとして独自に接していただきたい」という旨であった。

3. フォロー・アップ

習いはじめた柔道は，兄が遠隔地Ｈ大学に志を遂げて出ていったために，中断した。現在通常に中学生活を送っている。心身症状を呈したことはその後はない。母親は，少年期にかかる問題が発生することがあるという現実を今日の社会状況一般のこととして把えるのではなく，全く身近かにして驚くとともに，たいへんよい勉強になったと書いた手紙を筆者のもとによこした。「私たち母親ひとりで悩むのでなく，地域のみんなと相談しなければ解決しないということを痛感しました。」と美しい字で書かれた結びのことばは印象深いものであった。

4. 考　察

１）小児科臨床と臨床心理学的接近

児童臨床において，かかる小児科的な症例が今述べてきたような形で処遇されることは稀なことであろう。医学的な鑑別診断が正しくおこなわれるべきことはいうまでもないが，最近のわが国の子どものこうした心因性腹痛等に対する臨床心理学的接近の有効性もまた強調されてよい。体質心理学的研究（中村，1978）とともに，今後小児科臨床の中で発展させたい領域である。

本症例では，リウマチ熱の疑いはあるものの，症児の主訴が臨床心理学的に了解しうるものであったことが幸いであった。少なくともSullivan, H.S.の考えにふれずにpsychoanalyticにみれば，母親面接の段階で迷宮入りとなったであろう。

ギャング・エイジの出現，その発達心理学上の意味は，あらためて臨床心理学的接近によって塗りかえられようとしている。Blos, P.（1962）は，およそ10歳頃から前思春期に入るようにみて，「前性器性の再生は男性にとって潜在期の終了を特徴づける。この時期には，少年では（落ち着きのなさ，そわそわすることで）運動性が増強し，口愛的貪欲，加虐的行為，肛門期的行為（糞便嗜愛的快感，「汚い」言葉，清潔さをなおざりにすること，臭いことの魅力，擬声的な騒音をうまく作り出すこと）そして男根的，露出症的遊びの増強を示す。」といっている。本能衝動のたかまりに対応して，悪童たちは本児へありとあらゆる物心両面からの「汚ないもの」を浴びせてきた。「少年と少女では，前期思春期が全体的に異った心理学的発達を含んでいることは，よく知られた事実である。両性の不同性は著しい」。かかるBlosの指摘を待つまでもないが，少年達の残虐さはエスカレートしてひとりの少年を病院へ送りこんだり登校拒否を惹きおこさせたりもする。『天声人語』（朝日新聞：1978年5月5日）でこうした事件がやるせなくとりあげられる今日（天声人語子は「じめじめして，明るさのないいたずら」と評している），単なる発達途上の一儀式としてかたづけられぬ意味をふくんでいるのではなかろうか。Blosによれば「去勢不安に対する同性愛的な防衛」ということになるが，今日の犠牲者達は知恵遅れの子どもであったり障害をもつ子どもであったりするばかりでなく，底のないルールのない，いったん爆発すると今度はいじめられていた側の子どもが殺人にまで及ぶような陰湿さが特徴的なのである。幼少時からの対人的接触における未熟さが色を露にしている。

Sullivan, H.S.（1953）は，小学入学からchum（親友）を見つけるまでをjuvenile era（少年期）として，他の子どもとの交わりへの要求が，自尊心をそこなわぬままに達成されること。そして，「皆なと同じである」ということが特別質の意味あいをもつことを重視している。playmates（遊び仲間）をもてないような子ども，つまりは集団への結束ができず，集団での競争に組しない子どもは，ostracism（＝オストラシズム，追放）の対象となってしまうのだ，と。

かくして，幸にか不幸にかM男傘下の暴力的な悪童グループに結束しえなかった症児Ｊ君は，半年以上にわたるostracismの犠牲者として孤独と不安と苦痛に苛むことになるのであった。内面的，および外面的な病的危機に

直面するところとなり，学習意欲の低下をきたして急激な成績下降をみる。

ところが，訪れたクリニック側の適切なコンサルテーションによって，学校・地域ぐるみのクラス改革の中で，今まで不本意に屈服してきた級長のＩ君との間に，まさしく respect を伴った親交が成立するところとなった。そうすると，にわかに身体の危機としての腹痛，熱発，めまいといった症状は消え，身体的自己の安定はやがて精神的自己の変化を伴うものとなったのである。

この間のＪ君のＩ君に対する親密への要求は，ほんのわずかの期間に貢物をするがために母親への謀叛をさえこころみる程であった。罪（盗み）を犯すことをも恐れぬ大胆さであった。しかも一度ならず幾度ものことであった。Ostracism という孤独な苦しみの体験の末に獲得されようとしていたＩ君への友情の絆とは，一段質の異なる心の要求に他ならなかった。「自分以外の誰かのことが自分自身と同じほど大切なものとなりはじめる」という自己中心的感情からは独立したところの "interpersonal intimacy" への要求が，やってきた新しい精神発達の世界を形づくる。愛と理性に満ちた母性行動さえも，もはやこの少年の心のすべてを惹くことはできなくなっていた。盗みという行為も，母からの独立に際して影の面を選択したともいえるであろう。今まさに，かずかずの敵意や屈辱をこうむった果てに，かえって一挙に家を離れて旅に出るという青年期的心理の準備をすることになる。

２）児童から青年への転換点

人間生成のメタモルフォーゼにおける〝危機〟のもつ重要な意義を，われわれは強調したのであった（田畑他，1977）が，臨床青年心理学にとって，最初のしかも明確で深い意味あいをもつ変化はかかる９歳から13歳に至る年齢のあいだにおこる。およそ10歳頃という年齢が児童精神医学にとっても注目すべき区分であることは従来から指摘されていた。若林（1964）は，「成人における神経症的人格反応の成立を10才前後」としている。チック症と強迫神経症の研究からの結論である。

幾つかの経験から得られるこの年齢区分は，厳密な規定は差し控えておくとしても，「児童期から青年期へ」の移行が，従来の心理学的研究から見い出されたところの何らかの指標に基づくエポックに比べて，より本質的把握へと導くものを内に秘めているように思われる。

すでに Vygotsky, A.L（1972）は，子どもの発達における危機を正しくとらえて，「学齢期における危機的時代では，子どもたちに学業成績の低下や学習に対する興味の弱まり，活動力の一般的低下が見られる。子どもの内面生活は，ときおり病的な苦しみに満ちた体験，内面的葛藤と結びついている」と指摘し，危機的年齢に表面的にあらわれている発達の消極的内容は，人格の積極的な変化の裏側あるいは影の側面にすぎず，「すべての消極的兆候の背後に，ふつう新しい高次の形態への移行からなる積極的内容がかくされている」と述べている。危機的年齢をこえると，子どもの意識や環境への態度，内面的生活および外面的生活は，その時期における子どもの発達の全過程をもっとも基本的に決定する新しい人格構成とか活動に伴って変化するのである。

10歳頃―Vygotsky 自身が強調したのは13歳という年齢であったが―という年齢には，Piaget, J（1966）が指摘する如く，自己中心的知覚からようやく脱出して，子どもが客観化や抽象化の能力を獲得する。これはたんに，知的認識的側面におこる質的変化というだけではなくて，人格形成の諸点にわたるものである。主観性から離れた自己は独立して自己自身と，経験主体と対決するという宿命の時に達している。それゆえにこそ，「幼児期から児童期にかけてのノエマ的自己の形成・成長期に地下に潜行していたノエシス的自己は，思春期の開始とともに再び地上に姿をあらわす。注目すべきことには，このノエシス的自己の復活を先導するのは思春期の心理的変化であるよりも前に身体的な変化である」（木村，1978）といった事態が理解される。

危機は本来的に岐路である。内面的および外面的生活が病的な苦しみに覆われているとしても，精神が自立している事態ではそれ自身決して病的とはいえぬ。かかる意味においては，本症例の主人公は，難しい自己の病に苦しんだのではなかったのだし，身体が「痛み」を背負ったとしても，勝手にズレ出して痛んでいたのではなかった。まして今や，無事に independent の状況にあって，chum を得て学校生活を送っているのである。

今一度 Sullivan の知見にならっていえば，「前青春期は，それまでの発達段階の歪みが非常なマイナスとなって現われる時期」だとしても，「かずかずの敵意や屈辱をこうむり，さまざまな禁止を受けても，その傷を癒す力をもった〔愛，共感，寛容という〕治療薬がついに発見されたのである」。そのようにいうことが許されるであろう。この後に続く青春期がさらなる危機的時期であるとはいえ，Ｊ君がより深刻な精神的葛藤に苦しんだり，文字通りの病的危機に直面して，われわれの前に再び現れることは恐らくないであろう。

本症例からも，今日の子どもの発達における教育的問題および地域と生活をめぐる問題が，われわれの臨床活

動にとって無視しえぬ対象となっていることが明らかになっている。かかる現実を見すえてこそ，臨床青年心理学の実践は展開してゆくであろう。　　（間　宮）

Ⅲ　症　例　2

1.　症例の概要

症例　T.K.　男子　相談時年齢　13歳（中学1年）

1）主訴　登校拒否。登校時に頭痛，発熱などの身体症状が出て，登校できない。

2）問題の発生と経過《母親の供述》

小学校5年の1学期初に腹痛を訴え，2～3日学校を休んだ。父母が無理に連れてゆくと登校するようになった。その後順調に登校していたが，小学校6年の2学期末近くに，おたふく風邪にかかり10日間程学校を休んだところ，回復後2～3日登校しただけで2週間連続して休んだ。この時は友人が家まで誘いに来てくれるようになり登校を再開した。

中学校1年になり，最初の1週間は普通に登校したがそのあと高熱を伴う風邪にかかり，1週間学校を休んだ。回復後，1週間に1～2回は必らず休むようになった。夏休みが過ぎ2学期に入っても週に1～2回は休み続けている。本人の登校意志は決して脆弱なものではないが，家を出る段になると頭痛，腹痛，歯が鳴る等の身体症状を呈する。

困りきっていた母親は，新聞にて当相談室の存在を知り来談するようになった。

3）家族構成　4人家族。父親（40歳）。中卒。4人兄弟の長男で，兄弟3人で経営する鉄工所に勤務している。性格はからっとしていて明るく，麻雀，競輪，競馬といった賭事に目がない。本児の登校拒否に対しては，殴る蹴るの暴力をふるい矯正しようとしている。母親（38歳）。中卒。異父兄妹の末子として生まれ，複雑な兄妹関係の中で育つ。音に対して過敏なところがあり，雑踏，電車の中等では不安な気分になり叫び出しそうになる。心配性でいつもくよくよと考えているが，突如感情に走って周囲の者に当たり散らすことがある。本児の登校拒否に対しては，自分の養育態度が誤っていたという強い自責の念を持っている。妹（7歳）。小学校1年生。やや引込み思案な子供で，集団の中へうまく溶け込めない。本人（13歳）。クライエント。

4）本人の生活歴

本児は，父親と母親，父方の祖父，父の3人の弟，それに祖父の姉の子供（男性）の7人が生活する家庭に生まれた。この家庭に女性は母親ただひとりであったため，母親は家人の世話に忙しい毎日を送っていた。それ故，本児の世話はいきおい，"初孫の誕生"を喜ぶ祖父の手にゆだねられがちであった。祖父は若くして妻を亡くし，長男が結婚するまでの間，家事を自力で行ってきた人であったので，授乳以外の世話はほとんど母親の手を借りずに行った。本児を猫可愛がりに可愛がり，おもちゃをあり余るほど与えるほか，入浴，排泄の後始末まで面倒を見てきた。祖父のこのような態度に，母親は我が子を奪われたような気持を抱いたが，そのことを口に出して言うには遠慮を感じる自分であったという。

本児出生2年後，祖父と母親は遂に意見が対立し，本児一家は祖父たちと別居するに至ったが，祖父は別居後も昼間，本児宅を訪れ本児と遊ぶ毎日を送った。

本児4歳の時，幼稚園に入園させたが，本児は園の前まで行くと泣いてよく登園を嫌がり，たとえうまく登園した場合でも，他児たちとうまく交われず運動場の片隅で一人遊びをしていた。入園2カ月後，祖父の無理に行かせることもないという意見と園側の希望が一致し，退園している。

小学校に入学すると1年生から4年生までは普通に登校したが，「グループの中に入って十分に動くことができない。」「運動面でも学業面でも他児と比べ劣っている。」面が見られたという。小学校時代，同性同輩者の親しい友達（chum）が出来ず，いつも年下の子供と遊んでいたという。学業成績は小学校1年から中学校1年までずっと振るわず，クラスの下位にいて「自分は何をしても駄目だ」と思い込み，生来の内気で反抗のできない性格も手伝って，他児の暴力，嘲笑を一身に受けて学校生活を送ってきた。小さい時から花や動物，それに最近は鉄道が好きで，小学校1年の時に親が買い与えた百科事典をぼろぼろになるくらいまで読んでいる。家庭では母親に甘え，現在でも一緒に風呂に入ったり，母親の布団にもぐりこんできたりするという。

5）来談時における総合所見　本児は過保護な祖父，感情の起伏の激しい盲愛的な母親，そして粗暴な父親という成員で構成される家庭の中で育ってきた。こういった家庭環境は本児の集団の中へ入れないという気弱で小心な性格を醸成してきた。加えて，本児は学業面においても運動面においても他児より劣っていたので，クラスのスケープゴート的存在として小学校時代を過してきた。かかる本児をめぐる対人的環境は，少年少女期（juvenile）における同年輩の遊び仲間の少なさ，前青年期（pre-adolescence）における同年輩・同性との親友関係（chumship）の脆弱さを生み出してきたものと思われる。そ

の結果として本児はますます自己の世界に閉じこもりがちとなり社会的な未成熟さから登校拒否を発症させたものと考えられる。治療的援助としては，母一子に対し併行的にカウンセリングを行い，特に母親に対しては支持的カウンセリングが必要であろうと考えられた。

2. 母親とのカウンセリングの過程

母親との14回にわたる面接を4期に分けて記述する。

Ⅰ期（初回から4回目まで）初回面接では，時折自嘲気味の笑いを交えながら子供についての情報を伝えてくれる。その言葉の端々に子供の登校拒否に対する自責の念が見え隠れする。「家が火事で一生懸命119番しているが通じない。必死になって火を消そうとするが消えない」という夢を見たと語り，孤立無援の状況を表明する。2回目からは涙を交えながらこれまでの自分の育て方が悪かったのではないか。あまりにも溺愛すぎる面とあまりにも拒否的すぎる面があったと反省気味に語るとともに，自分がこれほど苦しんでいるのに夫は賭事に夢中で真剣に考えてくれない。「そんなものなおるかぁ。アホが。」と言う夫に腹が立つ自分を表明する。（3回目）　そして，いつものように身体症状を訴え登校できない子供を父親は殴りつけ，自分もオロオロし，大騒ぎした後，家の裏庭で砂遊びをしている子供を見つけ，「うちの子は本当に自分と戦っているのかしら。自分を見つめることができるほど利口なのでしょうか。」と，子供の気持のつかめなさを語る母親である。（4回目）

Ⅱ期（5回目から7回目まで）相変らず学校へ行けない。以前は1週間に1，2日休むだけだったのに，この頃は1，2日行くだけになった。夫に「お前の気休めのためにN大へ行かせていた」と言われ，「こんなに一生懸命になっているのに，そんな風にしか見ていなかったのか」と思い大喧嘩をする。その喧嘩を見ていた子供がふっといなくなったので，「少しは私の気持をわかってくれたかしら」と思い捜しに行くと，裏庭でのん気に遊んでいる子供を見つけ出した。その姿があまりに幼稚っぽかったので無性に腹が立ち，子供の学生服のボタンをひきちぎって脱がせ，「あんたなんか悪魔やわー」と叫んだという。子供は無抵抗で泣いていたが，後になって気を取り直し「ごめんね」と謝ったところ，子供の方も「僕の行動が伴なわんのがいかんのや」と言い，二人で手を取りあって泣いた。（5回目）　夫は登校しない子供を見て「叩き殺してやる！」と言い，母親は，「なおしたるわ！」と意地になって応えている。担任の先生に，「学校で急に泣き出したりすることがあり登校拒否の一般論ではおさまりのつかない子供だ」と言われたことから，「自分も子供の言っていることがどこまで本当なのかわからないときがある。風呂に一緒に入りたがるのもよくわからないが，その幼なさがふびんに思える」と語る。（6回目）　担任の先生に，「以前より登校日数が減った。N大へ行くのはやめてくれ」と言われ，「本人の登校意思が大事だ」と反発したという。父親も叩くことがなくなり，「本人の意思にまかせておけ」と言うようになったという。（7回目）子供は父親に初めて反抗し，ボールを投げつけた。（6回目）

Ⅲ期（8回目から10回目まで）登校する日数がだんだん増えてきた時期である。登校時に呈していた身体症状が消え，家の中でも元気がよくなってきた。家ではマイクを片手に戸を開け閉めして車掌気取りで〝電車ごっこ〟をしている。百科事典で調べたことを得意になって母親に話すようになってきた。「未熟だけど，ひねくれていないところがあの子の良いところ」と，子供を肯定的にとらえられるようになった母親である。（8回目）　冬休み前の保護者懇談会で，46人中40番の成績をもらい，担任の先生に来年度からの特殊学級編入を示唆され母子ともに愕然とする。身体症状も消失し登校日数も増えてきていることから，「もう少し長い目で見てほしい」と訴える母親。「この頃自分も怒ったりしなくなってきた。変ったなぁと思う」と語る。（10回目）

Ⅳ期（11回目から14回目まで）冬休みが明け，最初の1週間は1日登校しただけであったが，その後3学期中ずっと休まずに登校する。父親ににくまれ口を聞くようになってきた。父親のちょっかいに暴力で応えることがある。3学期初に登校をしぶった時，紙にしきりに何かを書いていた。後でごみ箱の中から拾い出してみると，「お母さんには感謝して，明日から必らず行く」といった類いの文章が沢山書いてあるのを発見。とても嬉しい気持になったという。（11回目）　学校でいじめられて帰ってきても，翌日「きれいに」出てゆけるようになった。（12回目）　3学期末に学校から真青な顔をして帰って来た。事情を尋ねると，「特殊学級に入ってもらうかもしれないから親に伝えるように」と先生に言われたという。3学期の成績はオール1であったが，親としては特殊学級編入には非常に抵抗がある。父親がこの件で学校へ呼ばれた際，「特殊へ入れられるようだったら義務教育といえども学校をやめさせてもらう」と校長先生に言ってき

た。沢山のお守りを枕元に並べ寝ている子供を見るとふびんでならない。「子供はこんな苦難にもめげず，いじらしいくらい頑張っている。子供に教えてもらっているみたいで，親も頑張らねばと思う。以前は子供の悪いところばかり目についていた。ほめる時もほめないといけないと思ってほめてきた。それがこの頃は素直に子供の良さが認められるようになった。あの子の良いところは優しいところ」と語る。(13回目)　子供の姿をみて，自分も外で働いてみたいと思うようになった母親は，パートタイムでテンプラ屋で働くことを決め，時間が無くなるとの理由で面接の終結を告げた（14回目）　なお，子供との面接はその後も継続して，別の治療者が行っている。

3. フォロー・アップ

子供担当の治療者によると，その後本児は級友にひどくいじめられ（本児が反抗したためらしいが），しばらく学校を休んだこともあったが，中学校2年の1学期はまず順調に登校したという。中元を届けに来た母親に相談室前で会う機会があったのでその後の様子を尋ねたところ，本児に特に問題のないこと，自分もパートを続けていることを語ってくれた。

4. 考　察

本児は中学1年になり登校拒否が決定的となるまでの間，幾度か登校拒否に近い状態を経験している。その最初のものは幼稚園への登園を嫌がったことであり，小学校5，6年時には腹痛・おたふく風邪から登校をしぶっている。かかる慢性型の登校拒否（平井，1975）は思春期以降になって急に発症するタイプの登校拒否と，その発症の機序に著しい差異がみられると考えられている。ここでは母親とのカウンセリングの中で浮かびあがってきた本人像，母親像，家庭のあり様を通して，思春期の慢性型登校拒否について考察を加えたい。

1）祖父，母親との密着した対人的距離

本児は乳幼児期に祖父の溺愛を受けて成長してきた。おもちゃをあり余る程与え，入浴，おむつの取り替えは勿論，本児が幼稚園への登園を嫌がると，無理に行かせることはないという祖父。一方，母親は「周囲の人がこの子をあまり可愛がるので自分だけは厳しくしつけようと思った」という接近―回避コンフリクトの中で，愛情を伸び伸びと我が子に注げられない不自然さを味わっている。「我が子を奪われたような気持になりながらも，それを口に出して言えない」母親は，初めての子供を自分の手で育てる経験から深まる育児に対する自信と満足感を感じえずにすごしてきた。それが親として，子供のことが心配でいつもくよくよと考え，突然感情に走ってしまう母親たらしめていると考えられはしないだろうか。更に父親は賭事好きで家庭を省みず，子供への関わりは暴力を用いて行うことが多かった。こういった，溺愛，不安，無関心といった各人各様の養育態度をとる家庭環境の中で育った本児は，伸び伸びとした自我の成長が押さえられ，弱くて未成熟な自我を形成することになったと考えられる。

2）劣等意識と友達からの閉じこもり

小学校生活の中で，運動面でも学業面でも他児と比べ劣っていた本児は，生来の気弱さとその劣等意識からグループの中へ入って遊ぶことができず，同性同輩との親密な友情が結べないばかりか，むしろクラスの成員にいじめられる対象となってきた。こうして本児は，「ボロボロになるくらいまで百科事典を読む」という様式で社会から閉じこもり，中学生になっても一人で電車ごっこをしたり，母親と一緒に風呂に入ったりするという幼稚な行動を示すに至っている。もちろん，こういった本児の未成熟さは，ひとり劣等意識による閉じこもりが原因であるとは言い難く，本児と密着していなければ不安になる母親の存在，本児が同一視するにはあまりにも家庭を省みない父親の存在も又その原因として考えられる。

3）治療過程からの考察

ここでは思春期に入り登校拒否が決定的となるに至った本児が，どのような過程を経て登校を再開し始めたのかについて，母親との面接を振り返り考察してみたい。Ⅰ期では，母親は子供に対する罪障感を切々と述べ反省的になっている。しかしその反省は心中の苦悩を吐露する一つの様態にすぎず，父親の暴力に対してもただオロオロするばかりで，それにどう対処していってよいのかわからずにいる。そして，「うちの子は本当に自分と戦っているのかしら」と，ふっと自分の子供の理解し難さを語る母親である。Ⅱ期に入ると，母親の中に子供の問題は自分がひきうけてゆかなければならないという確固とした気持が芽生えてきている。父親が子供に浴びせる暴言に，「なおしたるわ！」と反論し，担任の先生の助言にも，「本人の登校意思が大事だ」と，自分の考え方を表明できるようになった。子供の言っていることがわからない時もある。しかし，子供がふびんで仕様のない母親である。Ⅲ期に入ると，子供に元気が出てきて，幼稚ではあるが家庭で十分に動け，登校日数も増えてきた。子供の状態の好転と相まって，母親も子供を肯定的に受け止められるようになり安定してきている。Ⅳ期では，子供

は連続して登校が出来るようになってきた。学校でいじめられてもそれに抗して登校できるようになってきた。そんな子供を見ていると母親はいじらしくてならず外へ出ることが嫌いな自分も，敢えて働いてみたいと思うようになっている。母親自身も「自立」をはかる。

Ⅰ期からⅣ期までの治療過程を振り返ってみると，その経過のシエマとしては，母親と子供が祖父，父親，教師，学校といった外圧のかかる中で，共に戦いながら安定した関係を作りあげていったと考えることができる。こうした一連の母子間の基本的な信頼関係を構築してゆく共同作業の中で，子供は登校を再開し始めたと考えるのはさほど困難なことではないであろう。しかし，この母親とこの子供は，「親の子離れ，子の親離れ」というプレ青年期から青年前期にかけての大きな課題を何ひとつ解決しないでいる。母親が外に職を求めたのは「子供がいじらしくて」という理由であるし，登校を再開した子供も，「お母さんに感謝して」学校へ行っている。

今後，この親子がどのような「分離一個別化」を経験してゆくのであろうか。母親がこの問題まで立ち至らずに治療者と別れて行ったことに筆者は何やら煮えきらぬ思いを感じている。　　（渡　辺）

Ⅳ　症　例　3

1.　症例の概要

症例　H.T.　男子　相談時年齢　14歳（中学3年）

1）主訴　登校拒否，ＵＦＯに夢中になっている。

2）問題の発生と経過《母親の供述》

本児中学1年時4月中旬より，学校へ行かなくなった。理由は，学校の友達が弁当のオカズに「ピーマンを食う奴は下族だ」といったからということである。5月中旬に，当時母親が新聞集金で疲れ，本児に肩をもんでもらっていたときに突然「お母さん一寸待って！　何か頭の中にくる！」といって，もう人間の手の動きでない書き方で，何かわけのわからないものを，傍らの新聞紙に4分の1くらい一息に書いた。そして放心状態になった。その後，5月末頃，本児は「ＵＦＯの写真を撮った」というので，母親が某新聞社のミニ・コミに電話したら，それが掲載された。そして新聞を見て，沢山の人が見にやってきた。《しかし写真店に持って行って，フィルムを現像してもらったが「何も撮れていない」と返却される。》

2学期から，しばらく一週間登校するが，臀部に湿疹ができたり，「帯状疱疹」になったりで，再び欠席し，大学病院や医院に通う。10月から一週間登校し，また休み出した。そしてＵＦＯに凝り出したので，母親は児童相談所や学校にも相談する。ＵＦＯの写真撮影にも夢中になり，300枚くらいもっていた。本児は秘密にしている非公開写真であるため，雑誌社やＴＶ局には3～4枚を借用書つきでしか貸さなかった。《貸与後，返却をめぐってトラブルがあり，本児は不信感をもつ》。

その後，年末年始にかけて登校するが，今度は扁桃腺炎を患い，完治して登校すると，学校が流感で学級閉鎖したりであった。《本児は，この時期に「地球が破滅に陥る」という世界没落体験，「宇宙からテレパシーを送ってくる」という幻聴をもつようになる。》

中学2年になるが，本人は「クラスが変り，あまり馴じめない」といって，一週間くらい登校してまた休み出した。この年の夏休み中に，父親の勧めもあり，お金の続く限りと思い，ＵＦＯと関係があるという東京や和歌山の五条に出してやる。秋（10月）には，ＴＶ局やスポーツ新聞を疑いはじめ，不登校は依然続いた。

中学3年になっても，ほとんど登校しないので，6月に母親は本人を伴って，母親も勤務していた某大学病院精神科に受診。精神科医に2回受診し「学校なんてどうなってもよいから，本人のいまの状態に応じて長い目でみるように」といわれる。3回目から若い女医担当になるが，本人は「あんなちょんがーみたいなのは嫌だ」と不信感をもち，受診を拒み，それ以後ずっと中断している。

その年の8月から，N大生に家庭教師を依頼し，英語と数学のみは勉強しはじめている。

いっこうに登校することができない本人に，母親は業を煮やし，10月に某私大の心理学の先生に相談したら，精神衛生センターか臨床心理相談室を紹介された。

3）家族構成　4人家族。父親（55歳）。旧制中学中退。会社員。戦争体験をもっている。本児のことでも「自分のことは自分で考えてやれ」といい，母親には「内心気にしながら避けている」と思われる人。母親（48歳）。小学卒。本児が中3の7月から某病院看護助士になる。子どもには，口やかましく厳しくし，かつ深く侵入し，密着している。兄（17歳）。高校2年。幼少期から中学3年まで，すごく内気であったが，高校に入り先生の影響もあり，ガラリと変った。本人（14歳）。クライエント。

4）本人の生活歴。本児は，小学卒業までは順調に登校していた。幼少期から，母親が正直であることをいつも厳しくしつけ，他人と一寸したことでも，神経質になり，不信感をもった。幼稚園時に，ブランコの順を待っているとき，障害の子がいて先に順番を譲ったら，先生に注意され，「列を乱したのはＨ君でしょ！」と叱られた。

本人は怒って，「先生があやまるまで行かない」といったことがある。この時は，母親が先生に交渉して，なんとか納った。正義感の強い，神経過敏なところは他にもあった。小6のとき，近所の家のガラスに故意にボールをぶっつけて割り，「ボクが割りました」と申し出て，その家主をカンカンに怒らせてしまったこともある。このように，ゴマ化すことのできない生活史が，本児の場合，ずっと続いている。特に，一寸したことで他人不信感に陥ることが多くみられるようになってきた。

5）来談時における総合所見　本児は，幼少時から，母親の先取り的侵入的しつけ方針によって，馬鹿正直にさせられ，自分というものを打ち立てられないまま，母親と密着したかたちで今日に至っている事例と考えられる。また母親も，子育てに失敗してしまったとの過度の罪悪感をもち，分離できないほど密着してしまっている。

母親が筆者との受理面接依頼のために，電話口に本児を連れてきたとき，大声で荒々しい口調で「～しちゃってさー」と傍若無人に振舞っていた。しかし反面で威勢よく話さないでは，他人と対人的距離がとれないことも感じとられた。「今日も学校に行ってみようかという気分になっていた。《相談には》今日突然誘われて，あまり急で気持の整理がつかない」と焦っていたのが印象的。

上記の経過と，本人の電話での印象から，本児は見知らぬ他人への不信感と近づかれることへの不安とに陥り，〝出るに出られぬ苦境〟に置かれているという判断を筆者はした。

治療的援助としては，本人自身が来談しないので，まず母親を接触点としながら，本人の家族全体の布置状況をとらえるなかで，長期的に支援していく必要性があると考えられた。《この考え方の基礎には，思春期症例における母親への支持的カウンセリングの意義も含まれていることはいうまでもない。》

2. 母親とのカウンセリングの過程

ここでは，延べ12回の面接（電話による相談も含む）を4期に分けて記述する。

Ⅰ期（初回から5回目面接まで）。初回面接は，すでに記したように，本人（H.T.）の問題の発生と経過，あちこちへの相談歴などが自発的にされる。2回目からは，毎回のように，子どもとの家庭でのイジイジした，どうしようもない焦燥感が表明される。子どもは子どもで「学校に行くでね」と朝約束しながら，母親が勤めから帰ってみると「悪かったね」と学校に行けないことをあやまる。そして，相談に出かける母親に「相談に行っても無駄だよ」という（2回目）。どうしたらよいか途方に暮れる。中学留年にしたものか，高校入試はどうしたものか，社会は厳しいこと。このままではどうしようもない。子どもに迫る母親。母親の話を先取りする子ども。そして本人に「お母さんはすぐ怒ったみたいになる」「もっとやさしくしてほしい」「ことばがきつい」といわれ，「大人はわからん，勝手だ！」といわれてしまう母親（3回目）。子どもは母親が留守の方が楽のようだ。ＵＦＯの話は夢中にやる。相変らず学校には全然行けない。本人は「馴じめない」という。学校では「3学期でてくれば何とかなる」といわれる。子どもと学校とに板ばさみになり，母親が子どもに迫ると「兄の肩をもつ！」「学校は俺を厄介ものだから早く出そうとしている！」とひねくれた見方をする。主人も思案にくれている。「もう3年間待ちくたびれた」「気が狂いそうなのは私である」と訴える母親（4回目）。3学期一寸学校に行くが，気遅れして駄目。本人は家で詩を書き，ギターで曲をつけている。詩の内容は暗いので，つい母親は口出ししてしまう。いっそのこと就職させようかと思う。本人中2の頃，母親は発作的にハサミで刺しそうになったが，つまづいてはずれた。母親は内心謝り，あとで怖くなった。子どもに「じっくり聴いてもらえるところ」と母親は相談室に誘うが，「もう一歩踏み切れない」という（5回目）。

この時期は「もつれたがんじがらめの糸」といえる。自分に縛られ，子どもを縛りつけたことも気づかれず，ひたすらもつれ，がんじがらめになり，母親は重い，疲れた気分を延々と持ち続ける時期である。

Ⅱ期（6回目から7回目まで）。母親は，「心臓がドキドキする」「もうあとがない」という子どもの状態をみた自分の混乱，胸苦しさを述べる。子どもは高校受験の手続きに行くが，時すでに遅く，落胆している。母親は焦り，子どもと話すとつい自己主張してしまう。ここで母親は自分の生い立ちを話す。男6人，女4人の中で育ち，未来に希望を持たせた素晴らしい父親。その父親だったのに「こんなに子どもをしてしまって！」と初めて涙をホロリと流す。小学時代にかわいがられた恩師への思慕も表明する（6回目）。子どもを夜間高校にやったがよいか留年がよいか迷う。子どもには「学校，学校というので，お母さん嫌いだ」といわれる反面で，「俺のことで疲れてしまって」と慰められる母親。ここで母親は「自分がどうも小さい頃から，あれこれやって本人をいうなりにさせたのがいけなかったように，今思います」「小学6年までちゃんとやったのに，という気持が強くかえって

それがいけなかった」「植木の花も，今気づいたが，中学1年以降，全然やっていなかった」との気づきをし，カウンセラーと自分の楽しみについて話し合う。

この時期は「糸口の発見」の時期である。子どもとの確執，自分の生い立ちのことで，新らしい自分を母親自身が発見し，自分が楽しみ，自分を生かすことがテーマになった時期である。窮地からはい上り出す母親。

Ⅲ期（8回目から10回目まで）。子どもは中学校を卒業させてもらった。兄とパチンコをやってきて，気分をよくしていた。アルバイトをしたいとあちこち探している。子どもは「来年はどうしても全日制高校を受ける」といい，母親は「気長にやっていくように」という。近頃，向いの友だちと仲よく星を見たり，円盤を見たり，撮影したりしている。家族と一緒に，TVのスペシャル番組を見てよく話し合っている。数学者広中平祐を尊敬するH.T.。卒業証書を中学校まで受領に行き，先生方に「集団に平気になれるまで，1年でも2年でもゆっくりするように」と親身にいわれた（8回目）。

中学卒業したものの，来年は高校を受けるといいながらやる気がないみたいでTVみてゴロゴロしている本人をみて，落ちつかない母親。子どもとやり合う。子どもは「お母さん自分でもわかりもしないのに！」と反発。いま釣りに凝り，フナ，ドジョウ，鯉を飼育している。学校の先生の勧めもあり，家庭教師は3月一杯でやめた（9回目）。子どもは7月頃から自分でこれではダメだと気づきはじめ，勉強しはじめた。「自分自身で立ち上らないといけない」と，中学の先生に会いに行ったり，母親に内緒で，マラソンをやっていると称して，夕刊配達のアルバイトも始めていた。主人（父親）がこっそり話してくれた。本人「ハイ，これだよ」とアルバイト料をもらってきたのを見せてくれた（10回目）。

この時期は「赤糸，白糸の動きの萌芽」が現われる時期である。母親は，自分のもつれた糸口を発見することにより，自分自身の趣味にも生きるようになり，子どもは高校受験を目指し，自力で勉強しはじめ，同時にアルバイトとして夕刊配達も開始するようになる。それぞれが，いわば自分は自分であることを主張し，自分の道を建て直しはじめる。

Ⅳ期（11回目～12回目まで）。子どもは，他人の信頼を得て，ますます元気になる。新聞販売店の人に「しっかりしている。一日も休まない」といわれた。本人は「兄貴ってやっぱりちがうなぁー」という。UFO関係の人にも「（H.T.君）えらく変ってきたね！」といわれた。本人自身も，中学卒業後8月以降「円盤は円盤，高校は高校」と使い分けてきている。また「もっと人間的に大きくならなくてはいけない」ともいっている。母親は，本人が自分の力で高校を受けること，またたとえ高校受験に万が一失敗しても人生経騒になるようさせることを配慮していきたい。「やるだけやってみるように」と励ましている。子どもは3月以降，「自由になったみたい」といって，自分で計画を立て，時間割を作って勉強をしている（11回目）。

《この間，本人は自ら高校受験の願書提出等の手続きを済ませ，某私立高に無事合格する。》

子どもは，「どこでもいいから入れるところに」ということで新聞配達店で情報をきいてきていた。本人も「新聞配達をやってみて，いままでどうしてあんな些細なことに神経をとがらせていたのか不思議だ」「中学3年の頃，ほんとうに病気だったのだな」と回顧している。兄は高校卒業し，某社の単身寮に入ったので，本人も「しっかりせんといかんな」と責任感がでてきた。またUFO同乗体験者のG・アダムスキーの考えを取り入れ，「自然の力を大切にしないといけない」といって，いま〝自然の法則を大事にする会〟をつくるため，約10名のメンバーと取り組んでいる。（母親自身の気持はどうか？）子どもが中学校の頃のように，自分は拘わらなくなった。母親が子どもに「高校に行きたければ，家庭教師をつけてもよい」といったことで，子どもは「大きい海の上に立ったようで，ものすごく楽になった」という。自分でもイライラしなくなった。子ども（H.T.）を子ども扱いしないことが大切だと思う。家でもふとそれに気づくことがある。いまは自分が必要だということは，はっきり子どもに言えるようになった。子どもは自分が考えている以上にしっかりしている。母親は子どもに「どこへでも行ってこい」といっている。家から外へ出すということも自分は大事だと思う。1年前《来談時》の頃とずい分ちがう今の気持である。《ここで母親と面接終結を確認し合う。》

この時期は「赤糸は赤糸，白糸は白糸の明確化と独立化」の時期としてまとめられる。すなわち子どもは自らの進路を自らの力で選択し，実現する。高校受験と入学，アルバイトに取り組み，自らの生活に位置づけている。母親は，一時中断していた病院勤務を再開し，かつ親せきづきあいに精一杯取り組むことになる。自分は自分，他人は他人であるということ，子どもをひとりの人格として認められるようになった母親である。

3. フォロー・アップ

約3カ月後に，母親とフォロー・アップ面接をし，つぎのようなことが判明した。母親自身の近況，本人（H.T.）の近況を中心に記述。：本人― 高校入学当初2～3週間は緊張していた。「勉強は基礎からやり直す」といっていた。1カ月くらいして友達もできて自信がついてきた。友だちについても「外見だけではトッポイ子もいるけど，やさしい心のいい子がいるよ」と母親にいっている。家では，兄ともお互いにズバリ言い合っている。私（母）も子どもも変った。子どもは母親に対して，話題でも一々話しかけず，使い分けるようになってきた。「オフクロさんもだいぶすり切れてきたし…」と，逆に母親を教育してくれるようになった。アルバイトの新聞配達は，宅浪中の3月1日から自分で朝4時20分に起き，朝刊配達して後に登校する。夕刊も配達し，4月から集金もやり，集金の苦労談を家でやっている。学校の担任にもとても評判がよく，2学期が終ったら「クラス委員長に任命したい」といわれている。厳しい先生だが本人も好感をもっている。中学3年時の担任教師が訪ねてきて「学校いってるか」と問われ，本人「バッチリ！」と自信もって答えたという。中学校長，前の家庭教師，そしてカウンセラー（筆者）にも会いに行きたがっているらしい。本人は「僕は3年間寝ちゃったからな，あとの3年間倍にして返さなくちゃ」と頑張っているという。

母親 ― 一般的世間並みに頑張らせようとして，両親とも焦っていた。本人が中学3年のときは，一日休むとそれだけ出席日数が足りなくなると神経を擦り減らしていた。体重もその頃50kgを割っていた。ここのところ56kgでふつう。カウンセラーに「自分の気持が落ちつくことが先決だ」といわれたことがしみじみよくわかった。はじめは相談に通ってどうなるものか，と思っていた。いまは，私（母）が役に立つなら他人に奉仕したい心境。

4. 考　察

本症例は青年期前期に差しかかって，ある日突然登校拒否を発症し，ほぼ3年間にわたって不登校を続けたものである。そして不登校とほぼ期を一にしてＵＦＯ(Unidentified flying objects；未確認飛行物体）の世界に夢中になり，彷徨い，かつまた意外にもその世界でＧ・アダムスキーと出会い，『人生哲学』を学びとり，現実世界（確認世界）に帰環し，〝三年寝太郎〟並みに自己確立をしていった一青年の症例である。

思春期症例の場合にままみられる本人自身の来談拒否または来談葛藤のために，筆者が実際に臨床的に関与したのは，主に母親とであった。しかしその母親とのカウンセリングの過程で，2，3度本人とも電話で話す機会があり，本人自身の心境の変化も伺えた。ここでは，母親とのカウンセリングを通して映し出された本人像，および本人自身の自己表明を総合して，以下に臨床青年心理学的な考察を加えていくことにする。

1）青年期自我と秘密・対人的距離の重視

本症例では，最初に母親から相談申込みがあった際，母親に促されて本人が電話口に出てきた。当方としては，一応母親と本人との併行の治療的面接を予定していた。しかし本人の電話口での，見知らぬ他人への不信感と近づかれることへの不安感を感じとり，カウンセラー（筆者）は決して無理強いしなかった。すなわち，本人が本業であるはずの中学校にさえ，友達が些細なこと（つまり「ピーマンを（弁当のおかずに）食う奴は下族だ」といったこと）という理由で，葛藤状態に陥り，専門相談機関（大学病院，児童相談所等）あるいは民間療法所に連れて行かれても，馴じめず，ガラス格子をみて「牢獄のようだ」といい，女医を「あんなチョンガーみたいな奴は嫌いだ」といって拒んできていた事実がすでにあったからである。

自我境界が弱く，他人が侵入してくることに大声をはりあげて防衛している本症例の場合，その母親に対して治療的援助をしていくことは賢明であったと考えられる。つまり本人とは治療的対人距離をフリーにしておき，本人が援助を求めてこない限り，遠い関係を保ち，他方その母親とは緊密な治療的対人距離を保ち，治療者と近い関係を保つことが必要であると考えられたのであった。

ところで，すでに本人の生活歴でみてきたように，この母親と本人は密着した関係そのものであった。母親は，彼女自身の理想的しつけ―― 〝他人にいつも正直であれ〟――でもって，絶えず子ども（兄や本人）にも接していた。特に本人がひき起したさまざまなエピソードは，他人に先を譲る行為，そのような行為を教師が誤解し，本人は教師に不信感をもつに至ったこと，あるいは故意に近所の窓ガラスを割って「僕が割りました」と名乗りでて家主をカンカンに怒らせてしまったこと等で明らかである。いわば，本人は母親の心を生きていたといえよう。換言すれば，母親は本人に侵入し，両者は密着した関係に陥っていたといえよう。そしてこのことは，他方で他人との対人的距離のとれなさとなって現出してきていた。学校では，友達や教師と馴じめなくなってきて問題化（登

校拒否）してきたと考えられる。

母親とのカウンセリングは，このような母－本人密着の関係から出発し，母親は母親の生き方を，そして本人は本人の生き方を十分に発見していくことを援助することが主要目標になった。すでにみてきたように，母親のカウンセリングの第Ⅰ期が，母親－本人関係のいわば「もつれたがんじがらめの糸」として特徴づけられたことで明らかなように，この母親－本人の密着した対人的距離の問題からカウンセリングは始められたのである。

ところで，本症例の場合，ＵＦＯとは一体何であったのであろうか。

母親の言によると，本人はすでに小学３年の頃から，ＵＦＯらしきものをみており，学校から帰って「今日おかしなものを見たよ」「（西門のところを）ものすごい光ったものがあったよ」と口走っていたとのことである。

筆者は，本人にとってＵＦＯの世界は，未知なる，自由な空間であったと考える。つまり母親に侵入され，密着した関係から旅立つには，本人の場合，ＵＦＯに乗って未知の世界に彷徨することのみが唯一最大の方法であったと思われる。そしてそのＵＦＯを迎える宇宙船は，〝母なる船〟〝母艦〟である。そこにはすべてを包み込み，争いや戦いのない〝至高なる叡知的存在〟の法則によって支配されている世界が待ち受けていたのである。

興味深いのは，この母親もＵＦＯの出現を信じ，本人と共にＵＦＯ世界に一緒に遊泳している点である。本人が中学１年時に発作的に編み出した文字（＝「宇宙文字」）を母親は信じ，ＵＦＯの撮影写真，さらにはＵＦＯの飛行する様子，宇宙人の足跡などを，本人とともに見ているのである。この点で，この母親－本人は密着したままＵＦＯ世界においても，共体験をしていたといえよう。つまり，母－子ともになって〝未知なる宇宙〟を遊泳し，帰環してきたと考えられる。

さて，ＵＦＯの世界に彷徨うこと３年間，本人がそこで出会ったり，遭遇したことは結局何であったのであろうか。

11回目の母親との面接に先立って，家庭に電話連絡をとったとき，偶然本人が電話口に出て，つぎのようなことを語ってくれた。《この頃，すでに母－子ともに独立した関係に動いていた――母親とのカウンセリング過程は第Ⅳ期――ので，カウンセラーは本人と敢えて話してみた。》

「《前略》色々自分自身ぶっつかって，逃げることが無意味だと思うようになった。……色々ＵＦＯの勉強をしていくことで糸口をつかんだ。いま登校拒否ということを考えると，友達にびびっていたわけです。いま考えると，あんな奴になんでびびっていたかと思います。糸口というのは，例のＵＦＯの問題で，他愛もないことだった。ＵＦＯの問題には，やっていると〝精神的なこと〟が書いてある。ただ円盤をみて，ゲラゲラ笑うのではなく，〝精神的なこと〟が多く書いてあり，自分の問題解決の糸口になった。」

このように，本人は，ＵＦＯの世界に自分の問題解決の糸口を発見したという確信を，自信に満ちながら，しかも淡々とカウンセラーに語ってくれたのであった。[注4)]

ここで，本症例の場合の，秘密の問題にふれておく必要がある。

すでにみてきたように，本人と母親とは，密着した関係のままで，ＵＦＯの世界でも共有体験をしてきた。しかるに，母親と本人との間に，ただ一つ秘密があった。中学卒業が瀬戸ぎわになった３月頃から，本人は「マラソンに行く」といって，雨の日も外出するようになっていた。本人は母親に秘密にして，父親とのみ「男と男の約束だ」といって，新聞配達を始めたのであった。新聞配達ということ自体，母親はずっと以前（本人が登校拒否になる前）から，内職しごとにしていたのであった。それなのに何故に，母親には秘密にしていたのであろうか。

注４）筆者も，本人が学んだというＧ・アダムスキー（1966）に登場してくる宇宙船の主人役である大師のつぎのことばを確認した。この他，上掲書の随所に重要なことばがある。

「親しみのこもった眼で，彼は一人一人の顔を見渡し，その後，柔らかなよく響く声で直接私に話しかけてきた。

「われわれは『父の宇宙』のほんの少しだけでも君に見せることができて，とても喜んでいる。君がこのような問題に関心を抱いていることや，長年地球に生きて，生涯の大半をその追求に費やしてきたことをわれわれはよく知っている。今，君は自分の眼で確かめてきた。これまで永らく心に思ったにすぎない多くのことを，われわれの記録装置に照らして目撃してきた。この体験はきっと君の確信を深め，地球の人々に宇宙の法則を説明する上で大きな助けとなるだろう。

わが子よ。どこに生まれようと，どこに生きようと望もうと，われわれはみな兄弟であり姉妹なのだ。このことは地球の人類に繰り返し教えていかなければならない。国籍や皮膚の色などはどうでもよいことなのだ。肉体というのはほんの仮の宿りにすぎないからである。永劫（えいごう）の時間の中で，肉体はさまざまに転生してゆく。あらゆる生命の無限の進歩を通じて，各自はいずれあらゆる状態を体験することになるのだ。」」　（大沼訳，161頁）

このことについて，母親のカウンセリング過程をたどってみると，すでにⅡ期（6回目から7回目）において母親は，子ども（本人）との確執，自分の生い立ちのことで，自分自身気づいてきたことがあることがわかる。つまり自分自身が楽しみ，自分を生かすことを忘却していたことに思い至り，それまでの子どもにがんじがらめになっていた自分から，新らしい自分を発見するようになる。さらにⅢ期の9回目面接で，母親は子どもと口論し，双方自己主張をしたことがある。つまり母親と子どもは，ある意味で〝対決〟をし，それまでの一々密着した関係に終結宣言をしたことが伺える。母親は母親，子どもは子どもの，独立化の動きがでてき，一々子どもに干渉しなくても済む母親に変容してきたのである。社会的な自己を確立するための，秘密協定を父親とのみ結んだことは，きわめて意味深いことといわなければならない。本人は，社会的活動として，あるいは社会的自己試練の場として，父親の支えを得て，働くということ，アルバイトに立ち向っていったと想像される。

2）「自己と社会への対決」を通しての自己確立

ＵＦＯの世界に遊泳し，貴い『人生哲学』を学んだ本人は，現実世界（確認世界）に帰環し，さまざまの自己課題に立ち向うようになる。

その中で最大の社会的な場は，彼自らが父親とのみ秘密協定を結んで出入りするようになった新聞配達店であった。はじめは夕刊のみであったが，後に中学卒業した1年目（3月1日）からは朝刊も配達するようになった。本人はそこで自己確認として，新聞配達というアルバイトを通して，雨の日も風の日も定ったように行ってきている。高校入学してからは，集金まで始めるようになり，家に帰って苦労話をするようになってきている。「一通」の新聞を，一軒の手抜かりもなく配ってまわることは，決して楽なことではなく，全神経を集中して夢中に取り組む価値を見い出したと考えられる。

他人に煩わされ，焦燥感に悩まされ，神経過敏になり，さらには不信感に陥っていた本人が，現実検証をしはじめた場も，この新聞配達店であり，そこに出入りする社会人や少年達との対話であった。ＵＦＯのことを大言壮語したがる本人に「そんなことをいっても，高校へ行き知識や生活の知恵をつけなきゃあ，何にもならないぞ」とチェックしたのも，この店に集ってきた人々であった。つまり本人にとって重要なことは，そこが若者宿的な要素や雰囲気をもっていたこと，換言すればそこが集団療法的な雰囲気をもっていたことが想像できる。現に，本人が目出度く高校合格をしたとき，新聞配達店主は〝万年筆〟をお祝いに贈っている。他人によって賞賛され，喜ばれたのは，本人にとって生まれて初めての体験であったと考えられる。このことは，本人がＵＦＯの世界で学びとった『人生哲学』とまさに一致する現実世界でのできごとであったと思われるのである。

いま本人は，新聞配達店以外に，もう一つの場である高校生活という現実世界を，まっしぐらに進んでいる。本人は「円盤は円盤，高校は高校」（母親との11回目面接時の話）といっているし，「3年間寝ちゃったから，あとの3年間倍にして返えさなくちゃ」（母親のフォロー・アップ面接時の話）といっていることに端的にあらわしている。教師にもうけがよく，学友にもいろんなのがいるけれど，本人は好感をもってきている。

本人にとって，これからの人生途上において，まだいくつかの危機が待ち受けていると思われる。とりわけ異性との親密な関係の確立は，一つの大きな課題となるであろう。本人がＵＦＯの世界で見てきた異性は精神的な女性像であり，現実の異性との対決をしなければないことは，やがてめぐってくる一つの岐路として見守る必要があると筆者は考えている。　（田畑）

Ⅴ　症　例　4

1.　症例の概要

症例　K.C.　男子　相談時年齢　17歳（高校2年）

1）主訴　学習意欲減退，家庭内暴力，内閉

2）問題の発生と経過《母親と本人による供述》

本人高校1年の夏期休暇中に急速に学習意欲を喪失し，宿題にもほとんど手をつけることができなかった。本人は退学することを考えるまでに到ったが，その時は担任や両親の説得により思い止まったという。さしたる状態の改善を見ないままクライエントは第2学年へ進級する。2学期になり，修学旅行の時期をむかえるが，これも両親や担任の強い説得によって本人はいやいや参加したという。この旅行中にクライエントは軽微な触法事件を起し，帰宅後に自宅謹慎処分を受ける。その前後から父親に対する反抗が激化，その反抗のしぶりは家庭内暴力といっていいほどの様相を示すまでになる。一方，自室へのひきこもりがはじまり，家族との対話・交流もとだえがちとなる（内閉化）。姉，弟に対する敵意も強い。

3）家族構成　5人家族。父親（42歳）高小卒。苦労人であり，努力家・自信家である。ほとんど独学によって教養や実務知識を身につけた。「腹を割って話し合えばすべて問題は解決する。」という信念の持主。クリスチャ

ン。世話好き。会社経営。母親（42歳）高女卒。社交的で活動的。家事よりもどちらかといえば対外的な仕事を好む。姉（20歳）大学生。努力家であり，成績優秀。長男（クライエント）。弟（12歳），小学生。大都市近郊に居住する。中流家庭であり核家族である。

4）本人の生活歴。児童期まで主たる病歴は無い。幼少時から中学生になるまでは大変おとなしい良い子であった。皆からよく賞められた。小学校時代はソフトボールに熱中し，中学入学とともに野球部へ入部する。しかしまもなくクライエントはこの野球部を退部。理由は技術面・体力面共に他の部員と比較して劣等感を感じたためであるという。中1の冬頃から蓄膿症にかかり，治療を続けるが一進一退のまま，冬期になると症状が悪化する状態を続けて数年間が経過する。精神面における持続力・集中力の低下，イライラの増大，意欲面における減退がひどくなって行ったという。野球をやめてからは親しい友人にもめぐまれず，病院がよいのほかは釣などで孤独感をまぎらわせていた。クライエントが10歳の時から約6年間，母親は仕事に就き，日中家にいない事が多かった。父親は毎週のように教会にクライエントをともなって行っていたが，クライエントは内心〝教会なんかに行っても何にもならん〟と思っていたという。クライエントは「中1の頃から自分には陰日向がでてきた。」と話している。学業成績は中の上程度。高校進学に際しては担任教師も両親もそろって本人に専門高校への進学を勧めたらしい。しかし本人の強い希望で普通高校へ進学した。家庭の雰囲気は，両親共に家庭外でのつきあいや仕事で忙しく，落ち着いた雰囲気ではなかったらしい。父親自身は幼少時厳しい養育を受け，吃音を自力でなおすなど克己心も強く，独力で今日の地位を築いて来た。それが為に子供達に自己の信念を物語ったりすることが多いが，体罪を与えるなどのことはめったになかったという。クライエントの性格は〝おとなしい〟〝やさしい〟など内向的な傾向が強いが，反面非常に几帳面であり清潔好き，神経質である。クライエントの弟は幼児以来非常なヤンチャであるが，この次男が父親に一番似ているという。父親はこの次男を溺愛気味である。

高校進学後に学習意欲が減退しはじめた頃から，クライエントは「孤独感」「劣等感」「自己不全感」を内心強く感じるようになり，その頃からクライエントは或る問題少年とつきあうようになる。飲酒，喫煙，夜間の外出（親に隠れての野宿など），パチンコ店や成人映画館などへの出入りなど若干の非行傾向を示しはじめたらしい。しかし，かかる行動化はクライエント自身も述べているが，内心の強い「孤独感」「劣等感」などの裏返しとしての反動形成的性質の色濃いものであり，修学旅行中の事件もこれと同じ文脈において理解できるものであった。

5）来談時における総合所見

初回面接から得ることができた諸資料を総合した結果以下の諸点が指摘できる。①クライエント（以下Kと略す）を取りまく家族布置の中で，Kの児童期から青年期前期にかけて或る種のcomplexが形成されていった。それは「孤独感」「劣等感」「自己不全感」などに感情づけられたものである。②このcomplexが中核になって意欲減退が顕在化していったが，かかる症状形成において，家族内人間関係（特に両親との人間関係における感情的側面）という心理的側面とともに，身体疾患（蓄膿症）発症も重要な身体要因として挙げることができる。③このcomplexの裏返しとしての行動化（反動形成としての非行傾向・触法行為）は副次的なものであると判断し得る。④このような症状形成とK自身の青年期的課題（たとえば自我の形成・自我意識の確立）との関係はおそらく密接なものであろう。⑤自宅謹慎処分以後のKの内閉化や父を中心としての家族に対する反抗や暴力行為もこれと同じ文脈から理解することが可能であろう。これら五つの点が総合所見における主要な箇所である。Kの来談意欲は比較的強いものであったので，カウンセリングを継続することにした。両親へはKの問題発生の原因について我々の見方を伝え，担任教師へは自宅謹慎処分の早期解除を目的として，それぞれ数回の面接を行なった。

2. 治療の過程

治療期間は約4ケ月間，隔週に1回の割合でカウンセリングを継続。計五回の面接でもって終結をむかえた。Kは初回面接の直前になって鼻部疾患の根治を決意したとのことで，初回面接と第2回面接の間には約1ケ月間の入院生活によるブランクがある。第2回面接はKが退院後にもたれたわけである。

この身体疾患加療のための入院生活は，Kにとって，その心理面に一大転換をもたらす契機となった。Kは病院での日々，読書にひたる一方，他の入院患者や医師・看護婦達と会話を交わし，自宅における内閉化とはうって変った生活態度をみせる。

「鼻の手術したらスカーッとして気持良うなった。退院の日，女の子の部屋へ行って喋ってばかりいた。先生（医師）は鼻の手術やって精神のおかしくなる奴がいる言ってたけど，僕はおかしくなったんやない。ちょっとうれしくなったんでおだてだしただけや。」「あれ（触法事件）

は鼻が悪かったやろ。むしゃくしゃしてくる，それでやった。」「何だか急に喋るようになった。人も言うし自分も思うけど，性格が変ったと思う。」「人と無性に喋りたい。今まではとじこもってばかりいた。急に開放的になれた。急に心がひらけてきた。」（第2回面接時）

治療者はKの心の中に〝生れ育つもの〟を感じ，話題の焦点をそのあたりに絞っていったが，Kは次のようにも語った。

「青春の本，もう一度生きなおそうとか，そんなの読んでいる。何かがわいてきた。生きがいのあることがやりたい。前はイヤでしようがなかった。楽しいことやりたい。」「将来の事考えなあかん。その場限りはあかん。」「（前は）独りになりたくてしようがなかった。自分で自分を満足させていた。他に満足するもの，無かった。人とかわったこととして満足していた。」「（やっと）人と一緒の所がでてきたみたい。前は劣っていた。今は人と変らんようになった。」「今は生きることが楽しくなってきた。今は威張らなくても楽しい。本読んでいると楽しくなる。心がスッキリして，心が落ち着いてくる。」（第2回面接時）

Kの心の内部に〝生れ育つもの〟は〝生へのエネルギー〟とでも呼びうるものであろうか。それは，しかし恒常的に強化してゆくものではなく，それによって新たに内面的闘い（葛藤）がはじまることにもなった。

「今までは何も考えんとボヤーとしていた。それでは自分が年寄りみたいになってしまう。無気力ではあかん。気力が出てきたり無気力になったりする。無気力はもういやや。今まででは進歩がない。責任も果たさんと。もっと楽しく充実して生きたい。も少し大人になりたい。今まで人のことばかり気にしていた。もっと主体的に行動したい。」（治療者が〝K君自身一歩ふみ出た〟と発言したことに対して）「もう出なあかん。人よる出るのが遅かった。今まで虚勢張っていた。胸張らんでもいい。」「充実しているわけじゃないけど，今までより楽しい。今は孤独，あんまり感じない。」（第3回面接時）

カウンセリング開始から三ケ月も過ぎた頃になると，Kは自発的に勉強をはじめ，ちようどその時点に自宅謹慎処分も解除となり，Kは登校を再開する。自我意識が強まり，内閉傾向に終止符がうたれる。

「友達は面白くないけど，前のようにイライラせん。夜勉強やっているつう優越感がある。普通にしていても楽しい。皆と立場が同じになった。」「鼻の手術して自信ついた。根気がでて来た。イライラせん。」「前は人の言うことが分からんで，変な風に思っとった。今は我慢する。」「人を責めてばかりいた。今は人より自分を責める。今でも腹立つことはあるけど，もう欠伸も出へん。前はよう出た。部屋へもとじこもらん。孤独感も感じん。」「陰日向が無くなってきた。明るくなった。今は未来の事，将来の事考えている。もっと前進しなくては。」「決断力もでて来た。積極的に行動できる。解放的になった。」「大学へは行きとうない。専門的なこと見つけて行きたい。押しつけられるのはいやだ。自分の道は自分でひらく。」（第4回面接時）

このように，Kの性格傾向にかなりの変化がみられるようになり，未来への展望も次第に明瞭なものとしてKに見えてきている。さらに終結近い時点になると，Kにはかなり確かな自尊感情も育ってきて，Kは両親の反対を押し切り，自主的に「就職コース」を選択するまでになった。この事についてKは次のように語った。

「大学生活は暇があって，皆ブラブラしとる。働いた方が充実しとる。皆が行くというのはあまりしとうない。大学行くなら働いてでも行ける。父は大反対だけど，姉は賛成してくれた。」（第5回面接時）

治療終結時において，治療者が印象深く思ったのは，Kの内面に育って来た〝俺は俺。他人とは違う〟という一種の自己意識のあり方である。〝人は人，自分は自分の道を行くんだ〟という強い意志表示である。Kが自主的・主体的におこなった進路選択である。治療終結時におけるKの態度から治療者が受けた印象は，Kの〝不退転の決意〟とでも呼びうるような強い姿勢である。学歴社会日本において大学進学を止めることは今後のKの人生を一層困難にする場合もあろう。しかし治療者はKの心の中に育って来た自発性・主体性を尊重し，あえてこのKの進路選択に対して異をとなえることをひかえたのである。

3. フォロー・アップ

その後Kは高等学校を卒業し，某百貨店に就職した。当時の勤務成績は良好であったということである。

4. 考　察

本症例は，青年期中期に入ってから急激に学習意欲を喪失，内心「孤独感」「劣等感」「自己不全感」をいだきながら非行傾向を持つ少年との交流を通して否定的同一性（Erikson, E. H.）を強めてゆき，軽微な触法事件を起し，処分を受けた事から一転して父親を主たる対象とした家庭内暴力と内閉を顕在化していった一青年の場合である。これらの症状形成に加わえて，クライエントの性格特徴（強迫に近い神経質傾向，幼少時における〝良い子〟，思春期からの内向性格の強まり，など）を考慮する

と，診断的にはwithdrawal neurosis（笠原，1978）あるいはseclusive neurosis（山中，1978）と見てよい症例であるかもしれない。ただし，本症例の場合，退行傾向や内閉化が強まったのは触法事件後の自宅謹慎処分を受ける前後からであるから，その点で上記の症候群とは異なる点もある。この点はしかし，治療経過からみる限り僅少な差異であるようにも思われる。

Kの内心深くいだいていた，「劣等感」「孤独感」「自己不全感」に感情づけられたcomplexはどのように形成されていったのだろうか。初回面接以後カウンセリングの中で得られていった諸資料から，このcomplex形成の過程は次のように再構成できる。

まずKをとりまく家族人間関係のあり方であるが，母親および本人の供述から，父と弟，母と姉の感情的関係が強く，この点でKは家族の他の誰に対しても孤独感をいだいていたことが察せられる。特に思春期に入って身体疾患にかかり野球部を中途退部した頃から，この孤立感は深まったのであろう。この身体疾患（蓄膿症）は意志の持続力・集中力を低下させる。学業などにはかなり抑制的影響をおよぼしていたことが推察される。「何をやってもうまくいかない」「自分だけが中途半端」という「自己不全感」がこの頃形成されていったのであろう。

思春期以後顕著になっていったKの父－子関係はさらに重要な心理的要因である。Kの父親は幼少時にその父親（Kの祖父）から厳しくスパルタ式教育を受け，吃音を自力で克服，教養や実務知識は独学で身につけながら今日の地位を築いて来た人物であり，その意味からも「努力家」であり「自信家」である。外向的性格の持主といって良いかもしれない。〝腹を割って話し合えば何事も解決する〟という信念の持主であり，自分の人生哲学を息子達に語ったり，毎週のようにK達を教会につれていったという。この父親にくらべてK自身は幼少時から「よい子」「おとなしい気の優しい子」「神経質」などがめだつ性格の子供だったようである。Kは内向的性格特徴の前面に出た子供だったといってよいだろう。父が教会につれていっても，内心〝教会なんか行ってもしようがない〟と考えていたという。父の語る〝信念〟もほとんどKにとって〝心の栄養〟になっていなかったふしがみえる。かててくわえて，思春期以後のKはかかる父親に対して拒否的感情を強めこそすれ，自我理想にはなり得なかった父親であったと考えられる。こういったKの父－子関係にくらべて，Kの弟における父－子関係はもっと幸福なあり方を示しているといえる。Kの弟は幼少時から「やんちゃ」で性格も父親似であり，父親はこの末子をやや溺愛気味であるという。このような家族人間関係に加えて，Kの父親や弟に対する敵意の激しさから，Oedipus complexやKain complexの存在をKの内面（深層心理）に見ることができる。つまり，「孤独感」「劣等感」「自己不全感」に感情づけられたcomplexのさらに根ッ子の部分に，強力なOedipus complexやKain complexなどのコンプレックス群を仮定できるのである。そしてこれらのコンプレックス群はKが青年期中期になって，自我意識形成期にかさなることによって，なお一層強力に蠢動しはじめていたと考えることができるであろう。

青年期中期を自我意識形成を主要課題とする時期であるとみなすことによって，〝非行少年との交流－acting out typeの行動傾向形成〟（反動形成）そして父親に対するGewalt（aggression）の激化というKの心理過程などはより深く理解することが可能となるのではないだろうか。自室へのとじこもり（内閉化）もまったく同じ文脈から理解できると思われる。かかるKの父－子関係に比較して，Kの母－子関係における特殊性は臨床データからは明確にすることができなかった。

ここで，初回面接時と治療終結時における心理テストの結果の一部を見てみよう。ＴＡＴ２枚のカードに対するKの反応（空想物語）である。

ＴＡＴカードＪＭ１に対する初回面接時の反応には，当時のKの自信喪失感が投影されている。主人公が小学生として設定されてはいるが。そして終結時における同一カードに対する反応では，Kの意識中に育ってきたあらたな価値観が投影されている。さらにＪ７Ｍに対するKの反応を見てみると，初回面接時には「父親の死」が物語られ，終結時には（Ｊ７Ｍと７ＢＭは本質的に同一カードである）いわば「家出息子の帰郷と和解」が語られている。これらの空想物語はどのように解釈できるであろうか。初回面接時から治療終結時にいたるKの精神面の変化過程に重ね合わせて考えてみると，以下のように解釈できるであろう。

①Kの中にあった深い自信喪失感が軽癒し，あらたにひとつの価値観が育って来た。そしてそれはKの視野を広げる結果にもなっているらしい。

②　実生活における父親に対する反抗（格闘）と空想物語中の「父の死」の主題には共通するものがうかがえる。Kは真に親からの心理的離乳を遂げて一応の自我意識の確立をしてゆくために，父親（像）を内的に殺し去り，その為には父親と「格闘」しなくてはならなかったのであろう。いわば内的な父親殺しである。自我意識の確立する青年期において，この内的な親殺しがうまくゆ

ＴＡＴに対するＫの空想物語

初回面接時（面接法による）	治療終結時（記述法による）
（No.ＪＭ１） 楽器やな。曲を考えている。宿題を出された。……弾けそうにない。あきらめている。自信がない。弾けやんと思い込んでいる。まだ小学生。	（No.ＪＭ１） Ａという坊やは，いっしょうけんめい楽符に合わせて弾こうとしたが弾けなかった。それでＡは「俺はどんなことをやってもだめな男だ」と悲観した。しかし，いずれバイオリンだけで人間の価値を決めるのはバカなことだと気づいて，人間的に成長するだろう。
（No.Ｊ７Ｍ） おじいさんのことを思いうかべている。……お父さんを思い出している。このお父さんは亡くなった。……あんまり亡くなった人のことを思い出さない方がいい。亡くなった人は亡くなった人。……（あと沈黙）	（No.７ＢＭ） Ａはしばらく家を離れて，働いていた。そして何年かぶりにＡは親の許へ帰ってきた。Ａは以前親じをひどく嫌っていた。しかしＡは人間的に成長して今度親じに会った。そして彼は大変親に感謝する心で帰ってきた。親じはＡを「おまえも立派な男になった」と言いながら息子をじっとながめた。

かない場合に「家出」という現象がおこり得ると考えられる。終結時において「家出息子の帰郷と和解」が語られた理由もそのあたりにあるのであろう。ともかく終結時には父親（像）の修正と主人公の成長が語られる。コンプレックスもある程度自我に組み入れられ，Ｋ自身も人格的に成長したあとがうかがえる。青年期中期になって突然頭をもたげた危機をＫはどうにか克服できたと治療者は判断できた。（「孤独感」「劣等感」「自己不全感」などに感情づけられた complex は一応氷解したと判断できる。しかし Kain complex や Oedipus complex がどれほどＫに自覚され自我組織の中に組み入れられていったかという点については定かでなく，今後のフォローアップを通じて確かめて行きたいと治療者は考えている。）

（　生　越　）

Ⅵ　まとめ

本報告は，青年が人間生成を営むさなかで必然的に出くわす自己確立，自己決定，個性化，個別化，あるいはアイデンティティ（自我同一性）といった〝危機〟〝岐路〟に直面することが，最大の自己課題となる時期として，青年期を位置づけて行なわれた臨床青年心理学的考察であった。その際，筆者らの主要な視点または立場をつぎのような４点において具体的事例をみようとした。視点の第１は，対人関係の発達の筋道であり，第２はパーソナリティ発達における〝籠る〟ということ，あるいは〝自己内閉〟の積極的意義を明らかにすることであり，第３は，そのような〝籠る〟ということ，あるいは〝自己内閉〟の世界を構築することによって青年は自我をより強固になしえ，かつ秘密を所有することが可能になり，対人的距離を適切に保つことができるようになることの意義を明らかにすることであった。そして第４の視点は継続的に臨床的援助することを通しての接近であった。

本報では，男子症例を４例とりあげて，上記の視点を踏まえて考察が加えられた。

症例１では，熱発，腹痛，めまい，登校拒否を主訴とする pre-adolescence（前青年期）に特有の問題が考察された。その主要なポイントは，第１に最近学童期に心身症が増加してきていること，第２にかかる問題は，児童から青年への移行という発達の転換期にあらわれやすく，危機的状況を呈している姿を示していること，そして学校の今日的状況としてのいじめっ子，いじめられっ子などの発生と関連していること，第３はおよそ10歳頃が，前思春期（pre-adolescence）の開始期として区分されること，そして第４に自己の「分離－独立」の時期としてこの時期はとらえられ，"chumship" が健常な精神発達に不可欠であることであった。

症例２および症例３は，いずれも登校拒否を主訴とする青年前期の危機が考察された。しかし症状形成のあり方は両症例で対照的であった。症例２では，家族布置における対人的距離が，クライエントの幼少期から祖父，母親とに密着しており，対人関係の発達が同性同輩関係の確立にまで十分できていないことが明らかになった。登校拒否は，したがって学童期から慢性的にはじまり，母－子併行カウンセリングによって，登校拒否という危機的事態は何とか克服されていった。しかし，母－子密着の関係は，依然としてふっ切れてなく，本人も同輩関係にまだしっかり根をおろしていない点が指摘された。本症例における〝籠る〟ということも，百科事典に夢中になることによって，知的世界の満足にとどまり発達的に自己確立ということがなし遂げられていない点が残された課題となっている。

症例３では，対人関係における母－子密着の姿が明確に浮かんできた。青年前期に突然登校拒否が発症し，母－子密接のまま，本人はＵＦＯの世界に籠り，彷徨しは

じめた。しかし〝籠る〟ということの世界で獲得した『人生哲学』によって，母－子ともにＵＦＯの世界から帰環し，現実世界に根づけるようになる。本症例は，この過程で母親との対決を行ない，他方で父親との秘密を共有し，アルバイトに専念し，高校に進路決定を行なえるようになった。さらに自己と他者との「分離－個性化」を達成することが可能になった。異性との親密な関係の確立は今後に残された課題であることが指摘された。

症例４は，学習意欲減退，家庭内暴力，内閉を主訴とする青年中期の問題化したものであった。本症例は家庭内対人関係で孤立化し，あわせて思春期における身体疾患（蓄膿症）は意志の持続力・集中力の低下を生起させ，自己不全感を招来させた。本人の自己決定によって，入院し，身体疾患の治療を受ける。この入院は，本症例にとって〝籠る〟ということの貴重な体験となった。あわせて個人心理療法の援助によって，心理的な親殺しを達成することができたと考えられた。ＴＡＴの臨床的所見によって，このことが裏づけられた。進路決定も自らの力で行ない，大学受験を断念し，就職を決定しえたのであった。

文　　献

Adamski, G. 1966 Inside the Space Ships. Neville Spearman Ltd.（大沼忠弘訳　1975　UFO同乗記　角川書店）

Выготский, л, с. 1972 Проблема возрастной периодизации детскогоразвития（柴田義松・森岡修一共訳　1976　子どもの発達年齢的区分の問題『児童心理学講義』明治図書　７－17頁）

Blos, P. 1962 On Adolescence; A Psychoanalytic Interpretation. The Free Press of Glencoe, N. Y.（野沢栄司訳　1971　青年期の精神医学　誠信書房）

土居健郎　1979　オモテとウラの精神病理　土居健郎『精神医学と精神分析』弘文堂　124－140頁

平井信義　1975　登校拒否の概念　全国情緒障害教育研究会編『情緒障害児の教育　3　登校拒否児』日本文化科学社　５－26頁

笠原　嘉　1978　退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱――スチューデント・アパシー第二報―― 中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」　岩崎学術出版社　287－319頁

木村　敏　1978　思春期病理における自己と身体　中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」　岩崎学術出版社　189－221頁

中村　孝　1978　頭痛：よくみる子供の病気 ――心因性疾患　小児科診療，**41**(10)，141－144.

Piaget, J., & Inhelder, B. 1966 La Psychologie de l'enfant（波多野完治・須賀哲夫・周郷　博共訳　1969　「新しい児童心理学」　白水社）

Sullivan, H. S. 1953 Conception of Modern Psychiatry. Norton & Co., N. Y.（中井久夫・山口隆訳　1976　現代精神医学の概念　みすず書房）

田畑　治・生越達美・池田博和・伊藤義美・間宮正幸　1977　臨床青年心理学序説　名古屋大学教育学部紀要 ――教育心理学科―― **24**，85－106.

牛島義友　1961（第９版）牛島青年心理学　光文社　74－84頁

若林慎一郎　1964　児童神経症に関する一考察　名古屋医学，**87**，245－296.

山中康裕　1978　思春期内閉 juvenile seclusion 中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」　岩崎学術出版社　17－62頁

（1979年８月17日受理）

A STUDY OF ADOLESCENCE IN THE LIGHT OF CLINICAL PSYCHOLOGY (III)
—— Considerations on the cases of male adolescents. ——

Osamu TABATA, Tatsumi OGOSHI, Masayuki MAMIYA, and Naotaka WATANABE.

In this paper, we reported some cases of preadolescence and adolescence, and discussed on the positive meanings of the crisis or the cross-roads of life on which they inevitably encountered on such problems as the self-establishment, self-determination, individuation or ego-identity. In this research, we stresssed our view points upon the followings: firstly, the processes of development in the interpersonal relationships; secondly, to clarify the positive meaning of "withdrawing" or "seclusion-in-self" in the personality development; thirdly, to make clear that the adolescents, by keeping the self-secluding in inner world, accomplish the ego more stronger, can possess their own secrecies, and can keep the interpersonal distance properly; fourthly, to approach them by continuing clinical helping relationships.

In this paper, we reported the four male adolescents, and discussed upon the above view points.

In the case 1, we studied on the peculiar problems of the patient who had main complaints of hyperprexia, abdominal pain, vertigo and school refusal at pre-adolescence. The main points of issue arranged fours. Firstly, it has been increased psychosomatic disease among juveniles recently. Secondly, such a problem is liable to appear at the critical period when the development changes from childhood to adolescence, and the symptom presents a state of crisis. To add to this, it is related to occurrence of the bully under the present conditions at school. Thirdly, we are able to divide about ten years old as the beginning of preadolescence from childhood. And fourthly, we can recognize the period as "separating – independence", and that "chumship" is indispensable to normal and healthy mental development.

In the case 2 and 3, we reported the school refusals who began in pre-and early-adolescence, and discussed the crisis in adolescence. The symptom formation of the two cases, however, were clearly different. In the former case, the client has had so close interpersonal distance to his mother and grandfather in his own family constellation from childhood that he could not develop his "chumship" fully. At his primary school days, he began school refusal and has continued it chronicically. His critical problem, the school refusal, was conquered by the collaborative counseling with him and his mother. There remains, however, a close interpersonal relationship between the client and his mother, and he could not yet establish "chumship". Also in this case 2, the client "withdrew" in the way that he was absorbed in reading an encyclopedia, and gratified his intellectual curiosity only. The client leaves the task that he accomplishes his own developmental self-establishment fully.

In the case 3, the close mother-child interpersonal relationship has become clearly. The client had suddenly become school refusal at early adolescence, and withdrew and wandered at the world of "Unidentified Flying Objects (UFO)". He obtained the "philosophy of life" in the withdrawing world, returned from the world of UFO with his mother, and became to root to his real world. In these processes, he could confront with his mother, and moreover could have "secrecy" with his father. The client engaged in "arbeiting", and entered the high school by his own self-determination. He could achieve the "separation-individuation" with the others. A further problem is pointed out that he has not yet established the heterosexual relationships of intimacy.

In the last case 4, the client was a high school student. His main symptoms were as follows: the decrease in learning motivation, aggression to the family members (especially violent resistance to his father) and seclusion to his private room. Before counseling, he had been isolated and helpless at his home. Addition to it, he had been suffering from "ozena" chronically. This caused, we suppose, the lack of continuation of the will to learn. At that time, he looked like fallen into apathetic state day by day. After initial interview, however, he went to a hospital by his own determination for taking surgical treatment for his physical disease ('ozena'). It was the rare experience, namely 'seclusion', for him that he confined himself in the hospital not in the school for about one month. After the experience, he retired there, and the counseling began again. During the counseling, the client became healthy gradually, and had got rid of the apathetic state. At the termination of counseling, he

became capable of planning his own life. Concerning to his unconscious processes, it would be clear that the theme of the killing his 'inner father-image' was promoted secretly in his inner psychic world. He never talked out of it. We caught the above statement derived from his responses upon the projective test (TAT) by comparison with the initial one and the final one.